

「実戦」の意味は金的！

金責め格闘部に参加したただ一人の男。

道場で金蹴り、

シャワー室でハーレムフェラ手コキ！

そして生徒の母の熟女たちが！



玉子王子 著

1 章 ボッチ漫画オタクが巨マラのためファールカップをつけられず、金的を直に蹴られる

中学は、オタクとして蔑まれた暗黒の時代。

中学卒業と共に引っ越したので、藤田悟は心機一転、幸せな学生生活をおくろうと決めた。

具体的には、彼女だ。

彼女が欲しい。

というか、とにかくセックスがしたかった。中学でも、運のいい連中はもうやっていた。

もちろん、それが普通というのとは違うことはわかっている。

だが、高校なら並より上というだけで、もうやっていて不思議ではないだろう。

何とかそこに入りたい、と思った。

が、早くも挫折した。

教室で、一人座っている悟。

授業が終わり、多くのものが部活に動き出す。

悟は、そうではなかった。

不良連中でさえ、部活はある。それも、運動部だ。

運動部であることは、相当重要だ。

男子のスクールカーストは顔と部活で決まる。

顔がよく、花形の運動部に所属していればそれだけで上位確定なのだ。

悟は顔が並だが、サッカー部にでもいれば一様並程度の扱いは受けられるはずだ。

が、彼はそんなスクールカーストの力学など知らなかった。

年配の教師のように、漠然と「優れたものがカースト上位に付く」と思っている。

だから、運動部に入らないと……というか部活に入らないと、カーストの下位に押し込まれる事など知りもしなかった。

彼がフラフラしている間に、クラス内部では顔と部活で大まかに立ち位置が決まり、その中で立ち振る舞いが上手い下手で多少の順位付けが行われていった。

入学から一月が経ったこの日には、すでに順位は確定している。

見事に悟ははじき出され、何かクラスで班を作るときだけ、同じようなあぶれモノと集まるような立ち位置になっていた。

もちろん、これでは彼女など出来るはずがない。

こういう立場のものが告白などしても、差別されて相手にされない。

悟に好かれているらしい、というような噂が女子への「嫌がらせ」として使われるほどだ。

女っ気のない高校生活が確定したようなものだ。

ギリギリ、いじめられる立場にはなっていない。

それは、教室内で漫画を描くような人間がクラスにいるから助かっているに過ぎない。

今も、その男は不良らに嫌がらせをされている。漫画を書いているノートを取り上げられ、ゴミ箱

に入れられていた。

数年後萌え漫画で大ヒットを飛ばし、いじめていた連中をモデルにした不良キャラをクソミソに描く予定の男がいじめられているおかげで、何とか助かっている悟だが、かといって望んでいた高校生活とはかけ離れた日々である事に変わりはない。

——美少女でも降ってこないか……

萌え漫画クラスの他力本願の考えをしながら、フラフラと歩く。

——かわいい女子だけの部に男子俺だけとか、ならないかな。

男女と一緒に入れる部で、美少女が大勢いるならそれ狙いの男子が絶対に押し寄せるはずだ。

そうっていないとしたら、何か理由がある。

それがいわゆる「残念」という属性が生まれた理由だろう。

主人公が美少女を独占する理由付け。他の男に狙われない理由として、「残念だから」というわけだ。

悟が通う学校、兎代（うさしろ）学園はかなり大きい。昔は生徒数数千だったという。

今は激減し、千人を切っている。

そのため、部活のための施設はかなり充実している。

昔は柔道や剣道など、武道系は部ごとにちょっとした部室と体育館がセットになった武道館が与えられていた。

野球部も寮と野球場が整備されていた。

その他にも、運動部用の建物はいくつもある。

本当に広い敷地である。

それが逆に、寂れた印象を強める。

いくつもある武道館のうち、使っていないものが半分ほど。

野球部は数年前の不祥事を区切りとして廃部となった。

武道館の中で、奥のほうにある一つ。

実戦格闘部、という妙な名前の看板が掲げられている。

立ち止まる悟。

意味もなく歩いていて、端まで来てしまった感じだ。

「実戦格闘部ね……」

なんだかわからないが、一つ思い出す。

中学時代に「日本拳法部」というのが学校にあったのだ。

漫画オタクで、格闘漫画も大好きな悟は入学当初目を輝かせたものだ。

日本拳法というと、歴史の古い総合格闘技。

直突きという拳を横ではなく縦に使う、いくつかある最速とされる突きの一つを使う流派。

漫画で知っているが、教本をネットで探しても中々見つからない、結構マイナーな武道。

それが習えるならやってみてもいいかもしれないと思った。

しかし、実体はガッカリするものだった。

ただサンドバックを殴るだけだそう。

それも、不良たちが集まっていてとてもではないが「漫画オタク」などが入れる雰囲気でもなかつ

た。

——どこが日本拳法なんだよな……素人が。

格闘技どころかスポーツもしたことがない悟が**思い出し吐き捨て**をする。

それも、心の中で。

——ここもその程度だろう。

生徒数が減り、部の数も減った。そのため多少変なものでも小さいとはいえ道場付きの部室を使わせてもらえるわけだ。

普通の学校なら、ただの部室すら難しいのではないか。

思いつつ、中を覗く。

見て、何か引っかかる。

掛け声と共に、組み手をしている少女たち。

シャツにスパッツという体操服の少女ばかりだ。

引っかった理由がすぐわかった、女しかいないのだ。

監督だか顧問だかもおらず、年長らしい少女が何か言いながら道場の中をウロウロしているだけ。

「女だけ？」

「そうよ！」

思わず呟いた言葉に返され、キュッとパンツの中身を引き締める悟。

振り返ると、シャツにスパッツという体操服を着た少女が立っている。



振り返ると、
シャツにスパッツという体操服を着た少女が立っている。
外跳ねの髪は赤色だ。特に染めているわけでも、
特別な血筋というわけでもない。

特に理由なく赤色。

「見学？ 男子が来てくれたら凄く嬉しいよ！」
ポン、と遠慮も何もなく肩を叩き、
子犬のように愛想良く笑う少女。



外跳ねの髪は赤色だ。特に染めているわけでも、特別な血筋というわけでもない。

特に理由なく赤色。

「見学？ 男子が来てくれたら凄く嬉しいよ！」

ポン、と遠慮も何もなく肩を叩き、子犬のように愛想良く笑う少女。

「私、一年の神楽舞。よろしく！」

「あ、俺は同じ一年で、藤田悟」

「それじゃ、どうぞどうぞ！」

戸を開け、軽やかにジャンプして道場に入っていく。

「皆やってるね！」

「神楽遅い！」

「見学の人連れてきたよ！ 男子！ 一年で、悟っていうんだって！」

——名前かよ。

明るく活発、というのが多少行き過ぎている気がする神楽。

が、嫌いではない。

美少女と確実に言える容貌に結構大きい乳房で、親しげに話しかけてくるのだ、むしろ好きになってしまう。

女子と話すなど久しぶりの悟であるからなおさらだ。

「え？ 男子が来てくれたの？」

「そうだよ！ 根性有ノ助ってこと！」

女子たちが練習をやめて好奇の目を向けてくる。

思わず目をそらす。

クラスでは早くも**ゴミ扱い**されている悟、中学時代もろくな扱いを受けていなかった。他の男子になら当然やるようなことでも、悟にやってくれる女子はいなかった。

調理実習などで、他の男子の皿なら洗う女子が、悟にだけは自分で洗うように促すのだ。

男子だって洗って当然だ、という話はあるだろう。

だが悟が差別の対象になる人種か何かだったとしたら、他の男子との待遇の違いを指摘されたとき、逆切れして「男子も洗って当然だ」といえるだろうか？

男子全員に洗えというならともかく、一人にだけ差別待遇をして、文句を言われたら「男子も洗うべき」というお題目を唱えるのは違うのではないだろうか。

兎代学園に入ってから変わらない。

正確には、はじめのころは普通だったが、徐々にそういう扱いになりつつある。

そんな悟にとって、この後この部の女子たちが取る態度は。

こんな奴に入って欲しくない。

というようなものだと思えた。

「ホントに入ってくれるの？」

「男子が来てくれたら助かるよ」

「でも、本当にいいの？」

それは、「断れ」という含みなど一切ない、本当に来て欲しいが、迷惑ではないのかというような遠慮がちな質問だった。

「え、いや……もちろん入れてもらえるなら」

別にそんなつもりはまったくなかったのに、つい言ってしまう。

悪くはない。

大勢の女子の中に、嫌がられず入っていけるなどラッキーだ。

男子が来てくれたら助かる、という少女らの台詞からは、ほかに男子がいない、あるいは相当少ないというニュアンスが嗅ぎ取れる。

——もしや、これはハーレム？

「えー、つとこの部は……」

かなり入部に前向きながら、流石にまったく内容を聞かずに入るのは気が引けた。

たずねると、すぐに答えが返ってくる。

「実戦格闘部、その名の通り実戦に即した格闘の訓練をする部ですわ」

——ですわって……

指導していた年長らしい少女。緑の長髪先端は僅かに縦カール気味だ、似顔絵で誇張して書いた場合話し方的にもドリル縦ロールに描かれる気がする。

近くで見ると眼鏡をしているのに気づく。

「男子はすぐ出て行ってしまうので……今のところ一人もいませんわ。悟くんが入ってくれるならかなり助かるんですが……あ、申し遅れました。わたくし、西園寺公子と申します。部長で、三年生ですわ」

「あ、俺藤田悟です、一年で……」

「それじゃ、藤田くんですわね」

なぜ始めは名前だったのか、と一瞬考える悟。

すぐに気づく。

神楽が名前で紹介したいうか、名前だけで紹介したからだ。

「藤田君、どうでしょう？ 折角きてくれたんですし、体験入部していけば……」

「いや、どうせならもう入ろうかな。楽しそうだし」

「楽しそう……本当にそう思われますの？」

「え？ もちろんですよ」

「まあ……すばらしいですわ」

目を輝かせる西園寺。

周りの女子たちも驚き、ついで喜びの声を挙げる。

「信じられないわ！」

「楽しそうだって！ そんな人もいるのね！」

「って、藤田くん「そういう人」なの？」

「そりゃそうでしょ！ ウチの部が「楽しそう」なのよ！」

「そっか！ いいね！」

大歓迎に、思わず頬が弛む悟。

微妙に、おかしい部分がある事に気づいていない。

先ほど、練習を見たときに、女子ばかりである事に気をとられて悟は気づかなかった。

少女たちがお互いに繰り出す攻撃が、かなりの頻度で一部分に集まっている事に。

その部分は少女たちにとっては、ほかより多少痛い程度で済む場所。

だが、男子だとそうは行かない場所だった。

太股と太股の間、臍の少し下。

女にとってももちろん大事な女性器のある部分。

そこを蹴ったり叩いたりしあっていた。

防具をつけているので、女子なら問題ない。

だが、もちろん彼女らの攻撃は別に女性器を狙っているわけではない。

想定しているのは、男との戦い。

相手が男なら、そこにあるはずの急所を攻撃することを想定して訓練している。

そこを集中攻撃している。

それが、彼女らの言う「実戦」の意味だった。

通常の格闘技なら禁じ手の**男の急所**への攻撃を集中的に行う格闘部。

だから、別に女子部ではないのに女子しかいなかったのだ。

男子は入ってもすぐに逃げてしまう。

睾丸がもたないから。

というか、**潰れまくる**から。

ナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらい潰れてもすぐに薬一粒で再生できる。

だからこそ、遠慮なく潰され、潰れてもすぐに再生されて練習に復帰させられる。

男子部員はほぼ、練習にくるというより**睾丸を潰されにくる**という感じになる。

治るのだ、傷一つなく、薬一粒で数秒で睾丸は治る。

だからいいだろう、というのが玉を持たない少女らの考え。

しかし、男の考えは違う。

もちろん耐えられるものではないので、大体二、三日で退部する。

別に男子を追い出そうという意図は少女らにはない。むしろありがたいと思って大事にしているのだが、急所攻撃だけは特に遠慮がない。

それは並の追い出しより遙かにきついと睾丸を持たない少女らは今ひとつ認識できないのだった。

ともかく、神楽に案内され、二週間ほど前から使っていない男子更衣室に入っていく悟。

余分の服や防具は多い、男子部員の分が一樣用意されているが、いないのだから当然だ。

その背中を見送ってから、少女らが道場の真ん中に集まる。

「まさか男子が入ってくれるとはね！」



「まさか男子が入ってくれるとはね！」
「何も知らない一年だからかな」
「知らないって、二週間前に逃げ出したのは一年だから、別のクラスでも聞いているはずでしょ。人付き合い全然しないタイプならまだしもさ」
「ってことは、あの子話聞いてきたのね」
「いい根性してるわ！」
「っていうかドMね！」
「助かるわ！ やっぱキ○タマ蹴らないと練習にならないもんね！」
「よーし、キ○タマ蹴っちゃうぞ！」
「初日だからちょっとは手加減しないと！」
「何いってるんですの？ 彼はドMですわよ？」
歓迎の意味でも、みっちりと……殿方の一番大事なところを、
グチャグチャに潰して差し上げないと！」

「何も知らない一年だからかな」

「知らないって、二週間前に逃げ出したのは一年だから、別のクラスでも聞いているはずでしょ。人付き合い全然しないタイプならまだしもさ」

「ってことは、あの子話聞いてきたのね」

「いい根性してるわ！」

「っていうかドMね！」

「助かるわ！ やっぱキ○タマ蹴らないと練習にならないもんね！」

「よーし、キ○タマ蹴っちゃうぞ！」

「初日だからちょっとは手加減しないと！」

「何いってるんですの？ 彼はドMですわよ？ 歓迎の意味でも、みっちりと……殿方の一番大事なところを、グチャグチャに潰して差し上げないと！」

ナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらいなら数秒で再生させられる薬が市販されている世界である。

こういう部なので、当然その通称「ナノ薬」は大量に常備されている。

百粒ほど入っている瓶十個入りの箱が十個ほど道具置き場に積まれている。

都合千回分。

両方潰してから投与するなら、二千玉再生可能というわけだ。

……別に二千玉潰すために薬を常備しているわけではない、骨折などする場合もあるのだ。が、まあ建前としてはそうだが、やはり実際のところ**睾丸再生用**に用意された薬ではある。

男子部員が速攻で逃げ出すのが当然の部といえるだろう。

神楽が出てきてから、しばらくして悟も借りた体操服を着て出てくる。

先に出てきた神楽に、部長西園寺が近付く。

「神楽さん、しっかり装備してもらいましたわよね？」

「もちりん！ キ〇タマガード付けといてってちゃんといったよ！」

「もちりんって……まあ、ニュアンスは伝わるから良しとしますわ」

男性器を保護する強化プラスチックのカップ、ファールカップをつけるように神楽はもちろん伝えている。

「小さい人のから、チンチ〇大きい人用のまで好きなの選んでつけてっていったよ！」

子供用と思える小さいものから、世界的に見てもほとんど売れないため値段が高い特大サイズまで、集中攻撃される急所をせめてある程度守ってやろうという優しさからか、実戦格闘部ではファールカップの種類は豊富に取り揃えてあった。

しかし……

「さ、準備できましたよ」

「それじゃ、まずはわたくしから……と、そうそう、藤田くん、格闘技の経験はありますか？」

「そうですね……大体バ〇道を六年ぐらいですかね……」

「なるほど……なら手加減はいりませんわね」

バ〇道とは漫画のタイトルでもあるが、悟が知っているのはその一つのタイトルではなく、格闘漫画の金字塔「グラップラー刃〇」シリーズ全体のファンになって六年、という意味だった。

意味がわからないが、ようは格闘技はやっていないが格闘漫画マニアではありますよ、という話だ。

が、西園寺は漫画に詳しくないので、そういう**武道があるのだ**とあっさり勘違いした。

「では」

ボクシングのような構えを取る西園寺。実際には総合格闘技だ。

元々の彼女の流派がそれというわけではないが、とりあえず部員に教えるのはそれなので、まず出すのはそのスタイルである。

それに対し、両手を開いて手を合わせる形で、位置をずらす構えを取る悟。

合気道？ 柔術？

それらっぽい形だが、意味はまったくない、ただ形だけである。

が、それはやはり「やっているらしい」と西園寺に思わせる。

加減はいらないと思わせた。

踏み込む西園寺。

下から手を跳ね上げ、上腕による揚げ受けのような形で悟の手を押し上げ、自分との間に入れて視界を閉ざす。

しつつ、悟自身の腕によって生まれた死角の中で、爪先を跳ね上げる。

ゴチャ、と悟の男の部分に容赦なく西園寺の裸の爪先が減り込む。

足の甲が、陰囊を押し潰し、睾丸を圧殺する。

息を呑む悟。

蹴られた。

急所を蹴られた、と理解するには十分な僅かな時間の後、激痛と共に絶叫する。

「はぐあああああああああああああああ！」

「え、ちょ……」

足に伝わった感触に驚く西園寺。

カップのプラスチックの感触を予想していた。

それありきで、悶絶させる威力の蹴りを放っていた。

狙い通り、股間に命中した。

しかし、グニャッとした肉の感触しかなかった。

その感触は予想外だった。

が、そんな事は知らない部員たちは手を叩く。

「さっすが部長！　いきなりの金的！」

「しかもカップの上からなのに、見てあれ！　のた打ち回ってるわ！」

「っていうか、片金潰れたぐらいの勢いよ！」

「カップ越しではないでしょうけど！」

股間を押さえ、体を句の字にして転がる悟。

睾丸が痛い。

汗が噴き出す。

睾丸が痛い。

肩が震える。

睾丸が痛い。

腹筋が痙攣し、内臓を締め付ける。

睾丸が痛い。

目の前に何もないはずなのに、光が飛び散る。

睾丸が痛い。

自分が呻いているのか、人の声なのかもわからない。

とにかく、男にしかわからない激痛に倒れこんで丸まり、身動き一つできなくなる悟。

その悲惨な姿に、入部早々そこまでの状態にする気はなかった西園寺が慌て、一年生を見る。

「ちょ、ちょっと神楽さん！　彼、キ○タマにあれ、ファールカップつけてませんでしたわよ！？」



「ちょ、ちょっと神楽さん！ 彼、キ○タマにあれ、
ファールカップつけてませんでしたわよ！？」
「え、嘘……勇氣あるね！」
「そういう問題ですか！？ カップ有と思って
思い切り蹴り込みましたわよ！ っていうか反応と足の感触的に……

片金潰れてますわよ！」

「入部五分でキ○タマ潰し！ 流石のドM男も……

おチ○ポビンビンだね！」

軽いとか明るいとかを
超えた境地にある気がする
神楽の言動に西園寺は頬が引きつる。

「え、嘘……勇氣あるね！」

「そういう問題ですか！？ カップ有と思って思い切り蹴り込みましたわよ！ っていうか反応と足の感触的に……片金潰れてますわよ！」

「入部五分でキ○タマ潰し！ 流石のドM男も……おチ○ポビンビンだね！」

軽いとか明るいとかを超えた境地にある気がする神楽の言動に西園寺は頬が引きつる。

が、まあ普段のことなので気にしないで置く。

「と、とにかく藤田くん、大丈夫ですか？」

しゃがみ、肩に手を置く。

「ほぐうううう」

真っ青で震え、返事など出来ない悟。

潰れたのは右玉だけだが、左玉も強打されている。蹴られた時点で、後僅かに右に寄っていれば一緒に潰れていただろう。

喋れる状態ではない。

というか、ついに気絶してしまう。

「これは……失礼しますわ」

蹴られた部分がどうなっているのか、確認に動く西園寺。

別にさっさと薬を飲ませてでもいいのだが、自分の蹴りで男がどうなっているのか後学のために見ておきたいという思いから、ズボンに手を伸ばす。

下は体操服なので、あっさり脱がすことが出来た。

パンツから血が滲んでいる。

「やっぱり潰れてますわね」

周りに、少女たちが集まってくる。顔を赤らめ、男の股間を覗き込む。

「本当にカップつけてないよ！」

「スнгеードM！」

「キ○タマなどいるものか！　ッて感じね！」

「そうとは限りませんわよ。六年も普通の格闘技をしてきた経験で、急所への攻撃はイレギュラー以外ないと思ったのかも」

「え？　金責め期待してきたドMじゃ？」

「ドMといっても、急所攻撃は怖いものですわよ。お父様やお兄様も弟も、お母様やわたくしの蹴りが怖いそうですもの。でもそれと拮抗する喜びもあるので、一步踏み込むのがドMというもので」

「ぎゃははは！　ヤバイ家族だね！」

「……ドMでも、急所攻撃があると思えばカップをつけるものです。つけていないのは攻撃がないと思っていたから……つまりわたくしたちは根本的にこの方を勘違いしていたのかも……」

いいつつ、パンツを下ろす。

「まあ！」

ブルン、とポテトチップの筒のようなモノが太股の間に垂れる。

パンツが膨れ上がっていたことには、少女らは気づいていなかった。

なんとなく、肉袋が膨れ上がっている気がしていたのだ。

だが、直接肉筒があらわになれば誤解しようがない。

「ご、ご立派ですわ」



「ご、ご立派ですわ」
「ちょっと！ おチ○ポ大きいじゃないの！」
「これじゃカップ入らないね！
玉とおチ○ポ一緒に収納するんだから！」

「ペ○スが立派過ぎて 超大物用のファールカップにさえ入らなかった……それで 辜丸が潰れる

なんて笑い話ですわね」
まったく笑えない気がするし、
いっている西園寺もそれほど笑っていない。
が、とにかく巨柱を避けて陰囊を見る西園寺。

「ちょっと！ おチ○ポ大きいじゃないの！」

「これじゃカップ入らないね！ 玉とおチ○ポ一緒に収納するんだから！」

「ペ○スが立派過ぎて超大物用のファールカップにさえ入らなかった……それで辜丸が潰れるなんて笑い話ですわね」

まったく笑えない気がするし、いっている西園寺もそれほど笑っていない。

が、とにかく巨柱を避けて陰囊を見る西園寺。

「まあ、金のタマタマも大きい……腫れているにしても、元が相当としか思えませんわ。ますます入りませんわね」

「カップ無しでこの部にいてもらうのは大変かもね！」

笑う神楽だが、他のものはギョッとなる。

「た、確かにそうよね」

「カップ有でも悶絶するのに、無しじゃすぐ潰れるわ」

「まあキ○タマの一つや二つ、一瞬で治るんだけど……」

「嫌がるのよね、不思議と！」

別に不思議でもなんでもない気がするが、少女らは心底不思議そうに頷きあう。

「折角の男子部員だけど……これじゃ逃げられるわね……」

「いえ、そうとも限りませんわよ……」

部員の一人が、悟にナノ菓を飲ませる。

見る間に、腫れあがった陰囊が萎み、正常な状態に戻る。

左にしかなかった固体が、右にも姿を見せる。

二つとも、西園寺の見立て通り平常でも相当巨大だった。

流石にフェールカップに入らない超特大の一物の相棒といえる。

ずっしりと垂れ下がるそれを、キュッと握る西園寺の細く、ひんやりと気持のいい手。

「うふふ、弱みをこうして握ってしまえば殿方は言いなりですわよ」

おお、と部員たちが声を挙げる。

「いい手があるんですか！」

「任せてほしいですわね」

「どうするんです？」

「うふふ……それは……わかりませんか？」

周りを見る。

皆、顔を見合わせる。

と、手を叩く神楽。

「わかった！ 部を辞めたらキ○タマ握り潰すって脅すんだね！」

「それで毎日蹴り潰される可能性がある部には来ませんわよ？」

モミモミと、巨大な肉袋を揉みながら頬を引きつらせる西園寺。

怪我は治り、呼吸は楽になっている悟だが、まだ気絶していて美少女の玉揉みに気づいていない。

が、気づいていても現状で果たして喜べるかは微妙だ。

今の今、自分の男の命を蹴り潰したのがその「美少女」なのだから。

体験版終わり

この後、ハーレムというアメと金責めという鞭が悟に襲い掛かります。

どう考えても鞭の分量が巨大ですが、そこはドMに覚醒していくことで補われます。

続きは製品版でお楽しみください